
Fate/ClosedEyes

ロク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / C l o s e d E y e s

【Nコード】

N 1 4 2 4 N

【作者名】

ロク

【あらすじ】

かつて『聖杯戦争』と呼ばれた戦いがあった。

その戦いは『サーヴァント』とその『マスター』が命を賭けて『聖杯』と呼ばれる万能の神を奪い合ったと言われている。

そして膨大な年月が過ぎ去り、再び聖杯戦争が始まろうとしていた
……

登場人物紹介

月島大輔・17歳・今作の主人公。突然巻き込まれた聖杯戦争の被害者の一人。共に戦うサーヴァントはセイバーとアサシンの二人。

ジャンヌⅡダルク・19歳・今作のメインヒロイン。月島大輔の前に突然現れたサーヴァント。宝具は、敵と自分の周りを憎悪の炎で包む『聖女の断末魔ーデッド・オブ・マリアー』神の発した光で造られた剣『神光の剣ーエクシ・マリアー』理性を自らで破壊させる『狂気の発祥ーバーサーク・マリアンー』他にもまだまだ数多く存在するらしい。

エリザ・ジ・ジェニス・23・月島大輔のサーヴァントの一人。生前の彼女はあの有名な『切り裂きジャック』だった。宝具は、自らの武器で斬ってきた者達の血を怨みという毒性を持たせ、武器から出す『切り裂く者の悲劇ークリムゾンチャペル・マードー』

遠坂凜・17歳・大輔とは同級生であり、聖杯を奪い合うライバルであり、良き理解者でもある。普段は隠しているが、強大な魔力を秘めている。

アーチャー・？歳・凜のサーヴァントであり、噂（？）の相手。普段はクールな性格であるが、凜の危機には冷静さを欠き暴走する事もある。宝具は投影技を極限まで高めた『限界無き力ーアンリミテッド・エコーズー』

月島香乃・20歳・大輔の姉であり両親代わりで頑張る良き姉。現在は生計を立てる為、喫茶店『CAFATE』を経営している。

〔聖杯戦争の主なルール〕

第一条。マスター一人にサーヴァントは原則一人だけ。

第二条。サーヴァントはその真名をマスターに呼ばれるまではいかなる呪術、宝具も行使する事ができない。

第三条。マスターは、刻まれた令呪が消えてしまった時点で即敗退とする。

第四条。勝ち残る為、いかなる手段を行使しても構わない。

第五条。聖杯を手にした者はいかなる願いでも叶える事が出来る。

一章『プロローグ』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクションです。

一章『プロローグ』

いつもと変わらない道を歩いている。ただそれだけなのに、何故か今日は、それがとても素晴らしい事だと思える。

「セイバー」

果てなく広がる青空を仰ぎ見て、俺はほんの少しだけアンニユイな雰囲気装ってみた。それは別段意味を持たない。ただ何となくしてしまった行為なのだ。

「マスター、呼びました？」

「はぁ……」

アンニユイな雰囲気は一瞬で砕け散った。その原因は、呼んだ訳でもないのに勘違いして勝手に出て来たこの女『セイバー』のせいだ。本名は知らないし、何者なのかも知らない。ただ一つ分かっているのは、恐ろしい程の美人だと言うことだけ。

「ねえマスター！ 無視しないで下さい！」

「……あのさ、昨日の事なんだけど」

そう、全ては昨日の夜起こってしまったのだ。セイバーはいきなり俺の目の前に現れた。何の前触れも無く、本当にいきなり。

「昨日の事なら気になさらないで下さい、私は自分の義務を果たしただけですから」

この女は簡潔に告げているが、昨晚の事をこんなたったの二行程度の言葉では言い表せられない。いや、表してはいけなはずだ。

「はぁ……とりあえずお前は誰なんだよ？」

「私は……」

セイバーはゆっくりとタメを作る。どうせ大した事は言わないのだからと、俺は見くびる。

「貴方のサーヴァントです！」

一章『ブローグ』（後書き）

只今P Cが壊れてしまっているため、もう一つの小説『教皇庁禁書目録聖省』はお休み中です。

読者の皆様には多大な迷惑をおかけしますが、P Cの復旧まで今しばらくお待ち下さい。

二章『出会い―Destiny―』（前書き）

これはFate／Staynightのファンフィクション（二次創作）です。

二章『出会い—Destiny—』

時は昨日の夜に遡る。中々寝付けなかった俺は、夜風に当たろうと外に出ていた。流石に10月の終わりにもなれば、夜風は少し肌寒く感じてくる。

「上着羽織ってくりゃ良かったなあ」

そうぼやきながら、近くの公園へと向かっていた。11時過ぎの公園には人の姿がなかった。時間が時間だけに誰もいないのは自然な事とも言えるが、普段なら中年のサラリーマンやら、ホームレスやらがちらほら目に付いていたのだ。

「……っ」

薄気味悪い雰囲気のパークを後にしようとした時、不意に誰かの視線を感じた。とその次に訪れたのは強烈な悪寒。

「……ごくんっ」

分かりやすい動揺だとは思ったが、自然と身体がそうしていた。『今すぐここを去ろう』と自分に言い聞かせ、固まっていた足を上げる。

「待ってください」

不意に背後から透き通ったとても綺麗な声が聞こえた。丁寧な言葉遣いだが、どこか威嚇している様な物言い。

「は、はい？」

思わず答えてしまった。しかも声も上擦っていた為とても恥ずかしい。全身から変な汗と嫌な汗とが一気に吹き出してくる。

「貴方が私の新しいマスターか？」

いきなり意味不明な事を聞いてくる。けどどこか懐かしいような、しっくりとくる感じの声。俺はこの声を知っている？

「お、お前は誰だ？」

恐る恐る振り返ると、俺の目に写り込んできたのは、月夜に照らされた美少女の笑顔だった。ピンク色の髪、蒼い瞳、真っ白な肌。恐ろしい程の美少女だな、それが彼女への第一印象だった。

「私はサーヴァント、貴方の剣、貴方の楯、マスターがお望みなら、私は何にでもなりましょう」

彼女はそう告げると、胸に右手を添えながら立て膝を着く。それはまるで忠誠を誓う騎士のごとき振る舞い。男の俺ですらドキッとさせる程に格好が良い。

「サ、サーヴァント？」

「はい、その通りです。ではマスター、早速契りを……」

そう言って彼女は俺の顔に自らの顔を近付けてくる。彼女の吐息が顔に掛かり、俺の心臓の鼓動は一気に跳ね上がる。

「ちよっ……！！」

「んっ……」

彼女の柔らかい唇の感触を感じたとき、俺の思考は停止していた。もう彼女の事しか考えられない。だが、そんな幸福な時間は長くは続かなかった。

「ぐっ！ 腕が……焼ける?!」

彼女の唇が離れると同時に、急に俺の右腕は得体の知れない熱に襲われた。まるで熱い鉄を腕にそのまま押し当てられる、まさにそのままでの感覚だ。

「マスター、今暫くの我慢です」

彼女が俺の右手を握ってくれる。すると何故か熱が引いていくような、そんな気分になっていった。

「はぁはぁ……あり、がとう」

「いえ、私はマスターの為に在る存在です。ですからマスターを支えるのは当たり前です」

『従者』そんな言葉が1番合っているように思えた。主に使える忠実な従者。

「……!? マスター、お下がり下さい!」

いきなり俺は彼女の背に追いやられた。

「おやおや、随分と貧弱そうなサーヴァントとマスターではないか」

闇夜に紛れ、何者かが現れた。顔は良く見えないが、身体の影響から女だと分かる。俺は蛇に睨まれた蛙の様に動けずにただ立ちすくんでいる。本物の恐怖を感じたのは初めてだった。が、そんな俺の思いを察してか、サーヴァントが振り返った。

「マスター……このセイバーが命に代えてでも貴方を守り抜きます
！！」

「セイバー？」

それが彼女の名前らしい。とにかく今はセイバーを信じるしかないのだと認識した。すると不意に、得体の知れない敵の影が動き出して来た。

二章『出会い－Destiny－』（後書き）

感想等はお気軽に♪

三章『永久の契り―Closed Eyes―』（前書き）

この小説はFate／Staynightのファンフィクション（二次創作）です。

三章『永久の契り―Closed Eyes―』

闇から舞出て来たのは、やっぱり女性だった。金の髪をなびかせながら手に持った大振りの剣を構えている。

「マスター、相手はかなりのやり手です……私の後ろを離れない様にして下さい」

先程までの甘く可愛いらしい声ではない。緊張混じりの凛々しい声。その変化でようやく俺は事の重大さを悟った。

「か、勝てるのか？」

「セイバーを名乗る以上、負けは許されません」

その発言の違和感に気付く。『セイバー』と言う名は彼女の本当の名ではなく、ある種のコードネームの様なものらしい。

「ふふ、セイバーの名を持つのが自分だけだと思わない事ね」

冷たい氷のような声が聞こえ、間髪入れず次に聞こえたのは金属が互いに弾き合う高い音だった。

「くっ！ 貴女もセイバーなら、誇りは無いのですか？！」

「私の誇りは勝つ事よ、だから誇りは失われないわ」

妖艶な笑みを浮かべる敵のセイバー、それに対して、余裕を感じられない味方のセイバー。実力差は歴然のように思える。

「お、おい！ セイー」

「下がって！」

セイバーの声が俺を制した。俺にむやみに動かれれば戦いに集中が出来ず、勝てないと言う事らしいが、どうにも歯がゆい。

「やっぱり無能なマスターの様ね……」

信じられないが、相手のセイバーの声がすぐ後から聞こえてくる。

「っ……！？」

「マスター！！」

振り返る間もなく敵の剣が俺の横腹を射抜く……イメージが頭をよぎり、俺は横に跳ぶ。

「なにっ？」

予期せぬ俺の反応に、相手のセイバーは一瞬動揺を見せた。その隙を彼女は見逃さなかった。

「はあああ！」

――ガキンッ！

見事相手に一太刀入れることが出来たのだが、敵の身に纏う白銀の甲冑が、刃の侵入を拒んだ。

「ちっ！ まさか一撃でも攻撃を許してしまうなんて……」

そう言い残し、相手のセイバーは再び闇へ消えて行った。どうやら俺達は拾いしらしい。

「助かったみたいだな……」

——ドンッ！

危機が去り、ようやく安堵して地べたにへたれこんだ俺に、いきなりセイバーが抱き着いて来た。

「さすが私のマスター！ 華麗な身のこなしでしたよお！」

キャラが違い過ぎはしないだろうか、先程までの緊張感のせいかな、俺の中での彼女のギャップに拍車が掛かっている。

「離れろ……て」

不意に、俺の意識はまどろみの中へと溶け出して行った。かすれる意識の中、最後に見たのはセイバーの心配そうな顔だった。

三章『永久の契り―Closed Eyes―』（後書き）

感想やご意見絶賛承り中です♪

四章 『新たな影－Rin－』（前書き）

これはFate／Staynightのファンフィクション（二次創作）です。

四章 『新たな影－Rin－』

いきなり襲って来た敵も『セイバー』と名乗っていた訳だが、明らかに味方のセイバーよりも実力は上だった。同じ名を冠していたとしても、こうまでも実力差が出るといふ事はつまり経験不足、もしくは『マスター』である俺の非力さ、考えられる理由はこれくらいだ。

「マスターは非力なんかじゃありません、それは私が保証します。それ以前にあの者を退けられたのは、マスターのお陰ですしね……」

自嘲気味に弁解するセイバーに、二つ目の理由を否定され、残された理由は必然的に一つとなる。

「なら、経験不足か……」

そればかりはどうしようもない。戦いの経験を積むには、やはり戦う以外に方法は無い。だが実際問題『サーヴァント』を探し出して戦うと言うのは、余り効率が良くない、それに勝てる保証すらない。昨日の様な強い相手であった場合、返り討ちに遭ってしまうのがオチだ。

「なら、ゆっくりと経験を積んでいきましょう、マスター♪」

「はあ……それしか無いよなあ」

頭を掻きながら返事をしたが、あんな命のやり取りをゆっくりと、何回も繰り返すのは正直御免被りたい。

ーキーンコーン！　カーンコーン！

俺の通う『私立聖京学院効率』は県内でも有数のお坊ちゃま、お嬢様学校と呼ばれる、言わば金持ちの集まる学校だ。中には有名人の娘や息子等もいる。無論、俺の家はごくごく普通の経済力しか持たない一般家庭だが、この高校へは『特待生』として招かれた。

「よお大輔♪」

「ん？　ああ光太か」

ちなみに名乗り忘れていたが、俺の名前は『月島大輔』と言ったりする。良くある名前だから特徴は無いが、苗字である『月島』という言葉は結構気に入ってたりする。

「何だよその詰まんない反応は……せつかく良い情報教えてやろうと思ってたのによお」

「どうせまた、どこのクラスの誰が可愛いだのとか、そんな事だろ？」

コイツ『福沢光太』とは一年の頃からの付き合いで、いつも女の事ばかり考えている『24時間年中無休女馬鹿』と言う不名誉な通り名が着いているくらいだ。

「そうだけどさ、今日のは本気で良いんだよ♪　D組の遠坂って知ってるか？」

「遠坂って、あの遠坂凜のことか？」

もしそうなら、この学院で知らぬ者はいないだろう。『遠坂凜最凶伝説』の一部を紹介しよう……まず一つ、毎日の様に告られてい、告った相手が気に入らなければ、完封無きまでにボロボロに言い負かすと言う凶伝説。そして第二に、彼女が屋上にいると、時間に関係なく、空が赤く染まると言われている。

「そうなんだよ、その遠坂に最近彼氏が出来たらしくてさあ、その相手がまた恐ろしい程のイケメンらしくてなあ……」

そこまで熱弁して貰い悪い気はするが、全く興味が無い。遠坂の伝説話があまりに面白いから知っていたものの、本人には全く興味が沸かない。

「そうなんだ〜今度チェックしとくよ」

適当に答えて、俺はそそくさと『二年A組』の教室を後にした。

そして向かった先は屋上。

「あ、マスター！ 学校は終わったのですか？」

「いや、今は昼休みだよ」

学院まで着いて来てしまったセイバーを、とりあえずは屋上に待機させる事にしたのだ。

「そんな貴重な時間を私の為に割いてくれるなんて……」

涙を拭く動作をするセイバー。ずいぶんと大袈裟な反応ではあるものの、こんな事で泣いて喜んでくれるのならば、少し得意な気分になる俺だった。

「あら、こんな所で敵に会うだなんてね……運が良いのか悪いのか」
急に背後から女の声が聞こえて、俺は距離を取りつつ身構えた。

「……遠坂凜?!」

驚いたが、敵の正体はあの遠坂凜であったのだ……

四章 『新たな影－R i n－』（後書き）

感想ご意見募集中♪

五章『戦闘開始?』―Best Partner― (前書き)

これはFate／Staynightのファンフィクションで。♪

五章『戦闘開始?—Best Partner—』

「あら、私を知ってるの?」

遠坂凜は二つに結わいている黒い髪を弄りながら言ってくる。自身が学院内で有名人であることを彼女自身は認識していないのだろうか。

「色々と有名だからな」

「そう? まあ確かに、この道じゃ名の通った方だとは認識してるけど」

胸に手をやり、得意げに言い放つ遠坂。この道とは何なのか気にはなったが、そこはあまり触れないでおこう。

「マスター、あの女のサーヴァントの気配がしません……」

いつの間にかに、横へ来ていたセイバーが辺りを見回しながら呟く。確かにここには遠坂の姿しか見当たらない。

「ふふ、わざわざサーヴァントを使わなくとも、あなた達なんて余裕で勝てるわよ」

冷やかな目が怖い。とてつもない力を肌で感じられる。

「マスター、後ろへ!」

「遅いっ!」

――キーンッ！

どこからともなく飛んで来た光りの矢をセイバーは難無く弾き返した。だが遠坂の顔から余裕は消えない。つまり矢は囷で、本命は遠坂の攻撃だろう。

「マス、タ……」

目の前でセイバーが膝を着いて崩れた。何が起きたのか把握出来ないまま、俺はただ立ち尽くすしかなかった。

「ホントに、あなたのサーヴァントが可哀相ね……折角のセイバーという称号も、マスターのせいで全然活かし切れていないわ」

何も言い返せない。悔しい。自分の無力さ弱さが恨めしい。セイバーに申し訳ない気持ちがいっぱいになる。

「ち、違う！ マス、ターは、弱くなんかない……！」

「セイバー？」

セイバーは苦しみながらも、剣を杖に立ち上がる。ガクガクと両足が震える。俺は最低なマスターだ。いや、それ以前に人として最低だ。必死に戦う誓いを果たそうと尽力するセイバーに対して、もう駄目だ等と弱音を吐いている。

「まだ立てるの？ 流石、腐ってもセイバーと言うわけね」

気持ちを落ち着かせろ。頭をフル回転させろ。矢が飛んで来た方向

は？ あの女は何をしたんだ？ 考えろ、そしてまとめろ、答えを導け！

「セイバー、動けるか？」

「はい、あまり機敏には動けません」

「十分だ……！」

――ダッダッ！

俺は遠坂の左側へと走りだす。その瞬間、先程飛んで来た矢が俺の正面へと飛んでくる。高さにしゃがめば避けられる。つまり敵はある一定の高さから弓を射っている事になる。発射各から推測する。

「セイバー、敵のサーヴァントは入口の屋根の上だ！」

思った以上に近い場所に潜んでいた。それが逆に盲点になっていた。

「っ！？ 何でバレたの？」

遠坂の顔に、初めて焦りが見えた。セイバーは一つ跳びで屋根に移動すると、素早く剣を振った。

――キンッ！

何もないはずの空間が揺れ、そこから敵のサーヴァントが浮き上がって来た。

「くっ、凜すまない！」

敵のサーヴァントは偉く男前で、その赤い服が特徴的だ。光太の言っていた『遠坂の彼氏』とは恐らくこのサーヴァントの事だろう。

「お前はアーチャーだな？」

「ふっ、最初の矢で気付いていたんだろ」

『アーチャー』その名の通り遠距離戦を得意とする者が冠する名であらう。

「今援護す……」

「させるか！」

何かを投げようとする遠坂の腕を掴んで、それを阻止する。俺が押さえ込んでいる間に全ては終わりを告げるはず。

「……くっ、我々の負けだ」

相手のサーヴァントは潔く負けを認め、武器である弓を消して両手を挙げた。

五章『戦闘開始?—Best Partner—』(後書き)

感想ご意見募集中です♪

六章『和解—Cross Destiny—』(前書き)

これはFate／Staynightのファンフィクション(二次創作)です。

第六章『和解—Cross Destiny—』

「殺すなら早く殺しなさい……」

相変わらずのやり取り。俺とセイバーが苦しみながらも勝利してから小一時間、遠坂は『殺せ』の一点張りで、俺を困らせていた。

「だからさ、殺す理由もなきや義務も無いんだって！」

「理由？ 義務？ バツカじゃないの？！ これは戦争なのよ、聖杯戦争なの！ 勝った人間がただ一人になるまで続く戦争なの！」

「だから何だよ！」

このやり取りの中で、俺は初めて怒鳴っていた。遠坂の、余りに卑屈な態度に限界を感じていたのかもしれない。

「俺はそれでもお前を殺さないし、お前のサーヴァントも殺さない」

「あんた、何言ってるのか分かってる訳？ もう訳分かんない、変に覚悟とか決めてた自分が情けない……馬鹿みたいじゃないのよ……」

遠坂から今までの気迫は無くなっている。ようやく折れたみたいだ。

「あんた……かなり意味不明な人間よ、自分で理解してんの？」

「意味不明って、俺からしたらお前の考え方の方が意味が分からねーよ。何が死んだら殺す、殺されるだよ……馬鹿馬鹿しい」

いびつな形にしろ、俺と遠坂の仲は丸く納まったみたいだ。誰かが死ななくちゃいけないだなんて絶対に可笑しい。

「お前、名は何と云う？」

帰り際に、遠坂のサーヴァントに声を掛けられた。見た目もさる事ながら、声一つにしても男前だ。

「俺は月島、月島大輔だ。よろしく」

「良き名だ。俺はアーチャー、よろしく頼む」

俺達は互いに握手を交わした。遠坂には嫌われている様だが、アーチャーとは仲良くなれそうな気がした。

何だかんだで、午後の授業をサボる形になってしまったので、俺は屋上から降りがてら、その足で家路に着いた。

「今日は色々と疲れましたね」

「全くだよ……」

今日新たに気が付いた事がある。サーヴァントは普段、俺達と何だ変わらない服を着ているのだが、戦闘になると服装が変わるらしい。

因みに俺のセイバーは『桜色の甲冑』を身に纏う。

「あ、あのさ……今日遠坂に俺がボロくそに言われてた時、弁解してくれてありがとう、な？」

「ふふっ♪ 別に私は何もしていませんよ、マスター？ 私はまだ事実を申しただけですから」

そう言って優しく微笑むセイバーに、今朝まで感じていた嫌悪感を恥じた。命懸けの戦いに巻き込まれたとは言え、セイバーに罪はない。だとしたら、こうして共に協力し合うしかないだろう

「じゃあマスター、ご褒美に頭いい子いい子して下さい♪」

「い、いい子いい子って!?!」

余りに可愛いおねだりに、俺は思わず赤面してしまった。

「あはは、マスター可愛いですっ!」

どうも振り回されている感じがして、どうにも面白くない。なんて思っていると、不意にセイバーが俺の真ん前まで来ていた。

「これからよろしくお願いしますね♪」

そう言って、セイバーの柔らかな唇が俺の頬に触れた。恐らくはいや、完全にキスされた。

「なっ?!」

「ふふ♪ やっぱりマスター可愛い♪」

セイバーは、実は悪女なのではないか？ そんな疑問も浮かんだが、無邪気なその笑顔を見ているとどうでも良くなった。

「俺こそ、よろしくな」

小さくそう呟いて、俺は先に歩き出したセイバーの背を追いかけるような、歩き出した。

七章 『暗躍者—New Partner—』 (前書き)

これはFate／Staynightのファンフィクション (二次創作) です。

七章『暗躍者―New Partner―』

遠坂との戦いから早くも三日経ち、俺はまた平和な日常を取り戻し始めた。

「マスター、上です！」

……はずもなく、今もこうして敵の『サーヴァント』と戦っているわけだ。

「くっ！ セイバー、右に回避した後すぐ反撃に出てくれ！」

そして俺自身戦いと言うものに、すっかり慣れ始めていた。いや、正確に云うのなら戦いについての知識が増えたと言える。

「さあ俺達の勝ちだ」

「くそっ！」

セイバーの剣先が相手の『マスター』へと向いている。それに怯えるように、相手のマスターとサーヴァントは同時に逃げ出して行った。

「ふう……お疲れ、セイバー」

「はい。マスターもお疲れ様です！」

戦いの後、セイバーの緊張の顔から一気にオフへと変わる、その一瞬の表情を見るのが楽しみになっていたりする。

「それにしても、この二、三日の間にもう二組の敵と戦って来たけど、流石に疲れも尋常じゃないな……」

「命懸けの戦闘ですからね、気は抜けません」

その通りだ。この『聖杯戦争』は命懸けの戦いをし続けなくてはならない、バトルロワイヤルなんだ。頭では分かっているけど、実際に戦った時の、相手側の必死さにいつも気圧されてしまう。

「っ?! マスター、何者かがこちらを見ているような気がします！」

「敵、か？」

「いえ、まだ分かりませんが……一応警戒はしています」

もしかしたら戦いを見られてしまっていたのだろうか、そんな心配もしたのだが、こんな現実離れした事、誰が語ろうとも信じる人間はいないであろう。

「へえ……やっぱ強いね、セイバー」

視線の正体、それはあまりに呆気なかったといえる。その正体は恐らく、サーヴァントだろう。

「そんな警戒しないでよお……私は味方だよ？」

「なんの根拠もない、どう信用しろと云うの？」

相手はセイバーの言葉に深い溜め息を吐き出した瞬間、俺達の間近へと迫って来ていた。それは一瞬、溜め息を吐いたと同時に行ったものだろう。

「早い……!？」

「こうすれば良いのかなあ？」

――スッ

次の瞬間、俺はデジャブを見た。いきなりのキス、それは多分『契約の儀』なのであろうか？　そしてキスされた瞬間、俺達の時間が止まった様に静止していた。

「あ、ああ、あわわわ!!　何してるんですか!!　ま、マスターから離れてえいつまでくっついてるんですか??!!」

静寂は、セイバーの慌てふためく声によって解かれた。が、俺は放心状態で立ち尽くすしかなかった。

「これで貴方は私のマスターね♪」

世界がゆっくりと回り出している……ような気がする。

「そんな訳ありませんよ!　マスターは私のマスターで、一度に二人のサーヴァントのマスターになんてなれないんですよ!」

「ふーん、ならあんたどっか行って」

「なっ?!」

セイバーの素っ頓狂な声で、ようやく現実へと戻って来た。だがこの状況は芳しくない。敵なら退ければ良いが、どうやら敵対する訳では無いらしいので、それはどうも出来ない。

「と、とにかく落ち着……」

「マスターの馬鹿ああ!!」

——ドカッ!

「何で?!」

セイバーはいきなり叫びだし、近くにあった岩を投げてきた。俺は何とかその岩を避けたが、セイバーはどこかへ走り去っていた。

「なんて直情的なサーヴァントなのかしらね」

そもそもの原因が偉そうに腕組みをしている。よく見たらセイバーに勝とも劣らない美少女がそこにいた。が、セイバーが『可愛い』ならこの娘は『綺麗』と呼んだ方が相応しい。

「お前は、誰だ？」

「あっ、申し遅れましたね、私の事はアサシンとお呼びください、マスター」

小首を傾げながら自己紹介してくる。『アサシン』その名を冠するという事は、暗殺者か何かの類だろうか。その容姿とは似つかない称号だ。

「よく分からない状況だけど、最初の頼み聞いてくれるか？」

「何なりと、マスター？」

妖艶な笑みを浮かべて立て膝をつく。ついその一連の動きに魅入られてしまいそうになる。

「セイバーと一緒に探してほしい」

「了解致しました、ではでは♪」

最後だけふざけて見せて、アサシンはいなくなった。そして俺もその場から走り出した。ごちゃごちゃした状況だったとは言え、セイバーを傷付けたのは俺だ。それにセイバーは、知り合ってからまだ日は浅いものの、俺にとって掛け替えの無い人になっていた事に気が付いてしまった。

七章『暗躍者－New Partner－』（後書き）

感想、ご意見などありましたらどうぞ♪

あと、厚かましいお願いではありますが、オリジナルのキャラクター
1案がありましたら投稿して下さいとありがたいです♪

『名前』

『性別』

『その他設定』

これを参考に投稿お願いします♪

八章『切り裂きジャック―CoalMeName』（前書き）

これはFate／Staynightのファンフィクション（二次創作）です。

八章『切り裂きジャック―CoalMeName―』

夢中で駆け出していたものの、セイバーが見つからない不安や苛立ちが募り始めてくる。

「はあはあ……くそっ」

肩で息しつつも、俺は走り続けた。すっかり日も沈み、家にでも帰っているのだろうかとも思ったが、家の前まできてその希望は消えた。

「マスター、自宅にセイバーの気配は感じ取れません……」

「そうか、ありがとうアサシン……」

流石に心配そうな視線を送ってくれるアサシンに、俺はすがり付きそうになった。

――マスター！

不意に、セイバーの俺を呼ぶ声が聞こえた。その瞬間、再び俺は走り出した。

そしてたどり着いたのは、セイバーと初めて出会ったあの公園だった。目を凝らして見たとき、薄暗い公園内の一角から光が見えた。

「あっはははは！ 弱いなあ！」

狂った笑いと共に、セイバーの苦しむ呻きが聞こえてくる。

「セイバー!!」

俺は直ぐさまセイバーへ駆け寄る。よく見れば、体中傷だらけのセイバー。その痛々しさに、俺の罪悪感はさらに濃いものになっていた。

「テメエがそいつのマスターか？」

「そうだ、俺がセイバーのマスターだ！」

自らとセイバーに言い聞かせる様に叫んで見せた。相手のサーヴァントは両手に『ダガーナイフ』を持っており、それなりに俊敏そうな敵だ。恐らくは『アサシン』だろう。

「マスター、どうして？」

膝を着くセイバーが俺を見上げる。

「言っただろう？　俺はセイバーのマスターだから」

「マス、タ……」

セイバーの両目から涙が伝っていく。その涙を見て、どれ程の不安を抱かせてしまったのだろかと、再び深く反省した。

「なあにイチャついてんだよ!!」

敵のサーヴァントのナイフが迫っている事に気付いた時、もう手遅

れだった。

「マスター!？」

——キーンッ!

反射的につぶっていた目をゆっくり開けると、随分と大振りなナイフで敵のナイフを防いでくれているアサシンの姿が見えた。

「全く、感動の再会に水を差すとは……切り刻まれても、文句は言えませんよお？」

——ズバッ! グシャッ!

瞬きする一瞬で、敵のサーヴァントの両腕は肘から下を切断されていた。

「ぐあああああ!!」

悲痛な叫びが、場を凍らせる。だがアサシンだけは違っていた。彼女の顔には、うっすらとした笑みが浮かんでいる。

「ふふっ♪ 次は両足逝つとく？」

その狂気じみた声は、相手を退散させるには十分過ぎた。怯え切った敵のマスターは、サーヴァントを連れて泣きべそをかきながら逃げに行った。

「アサ、シン……」

「どうです、マスター？ 本物の切り裂きジャックを見たご感想は？」

冷ややかな眼差し、それは先程までのアサシンとは全くの別物で、見詰められると、背筋が凍るようだった。

「切り裂きジャックって……あの、殺人鬼のジャック・ザ・リップスの事か？」

「そうですよ、因みに正式にはエリザ・ジ・ジェニスそれが私の真名ですけど」

昔やっていたテレビの特集でしか見た事は無かったが、『切り裂きジャック』と言えば、誰しも一度はその名を聞いたことがあるであろう有名な殺人鬼の通り名だ。よくは知らないが、一世紀に渡りその正体が分からず終いだっただと言われていたが、その正体がまさか女だとは誰も想像出来なかったであろう。

「劇場型殺人の元祖なんて呼ばれてるけど、それは違うわ。ただ分かって欲しかった……私の苦しみを、誰かに分かって欲しかった」

そう語る『エリザ』の顔は、みるみる内に苦痛に歪んでくる。

「誰も本当の私を分かうとはしなかったのよ……そう、あれは初めての犯行のあった日、私はたまたま通り掛かった路地で見てしまったの。男が女を切り刻んでいる現場をね……当然私は逃げたわ、そして警察へ駆け込んで事件の事を話した。するとどう云う事か私は捕まったわ」

「どうして……」

落ち着きを取り戻したセイバーが尋ねる。

「第一発見者だからよ、まあ捕まったと言っても、事情調書って名目でね……そしてね、そこで調書を取られた警官の男にぞっとしたわ、その警官が犯人の男だった。男は私にある提案を持ちかけてきたわ、一度寝かせてくれれば無実にしてやるってね……」

「そんなの、可笑しいじゃないか……」

「でもね、あの当時の警察と言うのは、それほどに決定権があったのよ。それで私は言われた通りに一晚過ごしてやったわ……それが間違いだった。男はその後、何度も私を揺すって来た。だから私は男を殺した……あの女性と同じ様に、無惨に何度も何度も切り刻んで原形が分からない程に切り刻んだわ。そこから私は壊れてしまったのね……だから私と同じ様に体を売って生きている売春婦を殺していったの、これが切り裂きジャック、ジャック・ザ・リッパーの誕生秘話ってやつね……」

話終わった後、俺とセイバーはもとい、エリザも口を閉ざした。重苦しい空気が漂い、やり場のない複雑な思いが込み上がる。

「エリザ・ジ・ジェニス！俺は分かったよ、お前の思いも、怒りも……だから、だからもう我慢するな！」

そう叫び、俺はエリザを抱きしめていた。何を言いたかったのか、言っている途中で忘れてたしまつてかなりグダグタな言葉になってしまったが、俺は叫んだ。

「マスター、ありがとう」

そう静かに呟いて、エリザの体は光に包まれていった。

そして次の日の朝になった。

「て、何でエリザがいるんです？」

「何でって、マスターのサーヴァントだからだよ？」

セイバーが俺の横に座り込んでいるエリザに突っ掛かっている。朝からセイバーは全快だな、なんて微笑んでいる俺。

「昨日の感じから行くと、あれはあの後消えちゃいますよって感じの流れじゃなかったですか！」

「いやいや、忘れちゃったの？ マスターに真名を呼ばれたサーヴァントは、その時初めて力を開放出来る様になるって」

セイバーは、あつと云う顔をしている。どうやら忘れていた様だ。それにしても昨日はセイバーと同じく、このまま消えてしまいうんじゃないかと思ってしまうていた。

「と云う訳だから、これからもよろしくお願いします、マスター」

これから色々大変になりそうだなと、覚悟を決める俺だった……。

八章『切り裂きジャック―Coal Mine―』（後書き）

感想まってます♪

九章『凍の覚悟―Best Friend―』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

九章『凍の覚悟―Best Friend―』

「マアアアスウウタアアア!!」

あの世からの呼び声と言わんばかりの恐ろしい呻き声が聞こえる。

「ど、どうした、セイバー?」

呻き声の正体は、俺のサーヴァントである『セイバー』のものだった。

「エリザばかり……エリザばかり……エリザばかり……」

呪いの呪文を唱える様に何度も復唱するセイバー。その姿に、いつもの可愛いらしさのカケラもない。

「マスター、セイバーさんは何をしてるのかしら?」

「エリザは近づかない方がいいよ……」

呆れながら見つめる俺とエリザを余所に、尚もセイバーは呪文を唱え続けている。そもそも、どうしてこんな事になったかと言えば、俺に大きな責任があると思うのだが、あれは不可抗力というか、たまたま先にエリザの真名を知ってしまっただけで、意図してした事ではない。

「ならば、今セイバーの真名を教えてくださいよ」

これで打開出来るはず、そう考えた結果出て来たこの言葉が、火に油を注ぐ事になってしまった。

「何ですかそれ！ 仕方が無い、みたいにな……もうマスターなんか嫌いです！」

ぷいっと、そっぽを向いてしまった。ここ数日のセイバーは何だかこんな風に情緒不安定に陥りやすい。

「気難しいお年頃なのね」

エリザが俺を哀れむように呟いて来た。そして俺は、深い溜め息を吐きながら学校へと向かった。当然ながらセイバーはお留守番となった。

昼休みになり、俺は尋ねたい事が幾つかある人物を探して、屋上へと来ていた。今日は天気がよく、真っ青な空がどこまでも続いている。

「よお、遠坂」

案の定、探していた人間はここに居た。彼女の名は『遠坂凜』先日戦ったマスターではあるが、恐らくはもう敵対する事は無いと、俺は勝手に解釈している。

「何よ……また勝者顔をしに来た訳？ あんたって案外性悪なのね」

「お前こそ、可愛い顔に似合わず捻くれ口しか叩けないのか？」

そう、遠坂は黙っていれば可憐な美少女なのだが、性格を云えば、

かなり素直でない。根はいい子だとは思うのだが……。

「か、可愛いつて……ふ、ふーんそれがあんたの手口な訳ね」

何の手口ですか、遠坂さん。

「まあそれは置いといて……幾つか聞きたい事があるんだけどさ、良いかな？」

「嫌よ！」

即答で断れた。取り付く島もないとはこの事だ。だが引き下がる訳にはいかない。

「頼むよ遠坂！」

「ふふっ♪ 嘘よ、何でも聞きなさい？ あんた馬鹿そうだから、この凜様が丁寧に答えてあげる♪」

悪戯な笑みを浮かべる凜に、一瞬ドキッとした。かなりモテると云う伝説は、あながち嘘では無いのかも知れない。

「ありがとう！ じゃあ早速聞くんだけどさ、この戦いの目的はなんだ？」

「そこからなの？」

呆れた顔をする遠坂に頷くのが怖かったが、素直に頷いた。

「はぁ……良いわ、一から教えてあげる！ 感謝しなさいよ？」

「すみません」

「まず第一に、この戦いの目的はただ一つ……聖杯を手に入れる事」
『聖杯』その単語を、俺は幾度となく耳にしている。思い返せば凜にも言われたことがあったのに気付いた。

「最後に残ったサーヴァントとマスターだけがこの聖杯に辿り着ける。そして聖杯に望みを叶えてもらえる」

「そう、だったのか……」

この戦いの意義について分からずにいた俺は、ようやくその真の意義を理解した。人知を越えた力を持つ聖杯に、願いを叶えてもらう為に俺達は戦っているのだと。

「勘違いしないでよね、何もただ願いを叶えて欲しくて戦っている連中だけじゃ無いって事、忘れないでね」

「……遠坂は、そうなのか？」

一瞬だけ凜が寂しそうな顔になったのを、俺は見逃さなかった。

「別に〜たいした理由なんか無いわよ……ホントに、何もね」

これ以上聞いてはいけない気がして、俺は口を閉ざした。

「そ、そうだ！ 他に聞きたい事とか無いの？」

遠坂は無理に笑顔になると、話題を戻して来た。正直な所、俺とし

ては助かった。あのままじゃ、凜に何て声をかけていいか、情けないが俺では分からなかった。

「そうだなあ、この戦いにルールは存在しているのか？」

「ルール、ね……大まかなルールは三つ、一つ目はサーヴァントについてね。サーヴァントはマスターに自らの真名を呼ばれるまでは自らの宝具、呪術すら使えない。そして二つ目、これはアンタにとっての重要事項、マスターについてね。マスターは自らの令呪を失った時点で即敗退。まあ、要は使い所を見極めて使えって事ね。そして最後の三つ目ね、これが最も重要な事よ、その内容は……ただ勝つ事、以上！」

最後の最後で、凜はきつぱりと言い切ってはいたが、俺の頭の中では疑問譜が大量生産されていた。

「ただ勝つ事だけって……？」

「そのままの意味よ？ どんな手段を取ろうとも、ただ勝てば良い。それがこの戦争のルール」

シンプルで分かりやすいが、裏を返せばとんでもない事になる。何でもあるのルール制にすれば、当然ながらどんな汚い手をおおうと良い訳になる。

「全く、命懸けの戦いで何でもありだなんて、随分と粗末な扱いだな……」

「そう？ 私はそうは思わないけど。だって勝てば良い事だし、それに命懸けだからこそ、どんな手をおおうと生き残るんだって考

えに至るんだと思う」

凜の真剣な瞳。俺はその力強い眼差しで悟ることが出来た。これは覚悟の問題なのだ。覚悟の出来ている者は、いまさら何でも有りと言われようと関係がないのだ。何がどう転ぼうと勝利だけを目指す。それが覚悟の有る者の強みなのだ。

「凜も覚悟が出来てんだな……」

「少なくとも、あんたよりはね♪」

今日は凜と話が出来て良かったと思う。凜に『覚悟』と云う最大の武器を教えてもらえたからだ。

九章 『凍の覚悟－Best Friend－』（後書き）

感想や意見を募集中です♪

あとオリジナルサーバントの案やマスターの案等も。

外伝『初めてのお使いーInsaberー』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

外伝『初めてのお使い―Insaber―』

「マスター、起きて下さい」

「ううん……もう少し」

「遅刻してしまいますよ？　起きてください、マスター」

私の一日は、こうしてマスターを優しく起こして上げるところから始まります。

「……いい加減に、起きろ〜！！」

「わああああ！」

私の大声に驚いたのか、マスターが跳び起きてくれた。……誤解の無いように言いますが、いつもはちゃんと優しく起こしてますよ？

「お目覚めですね、マスター♪」

「ああ……おはよう」

眠気眼のマスターは何だか可愛いです。と、時間がなかったんだっ
た！　優秀な私はすぐにそれに気付き、マスターをリビングへと引
きずって行く。

「あらあセイバーちゃん、いつもいつも悪いわねえ♪」

「いえ、これが私の役目ですので、カノ姉様はお気遣い無く」

この可憐な女性は『月島香乃』さん。マスターのお姉様であり、保護者代わりをして下さっている立派なお方です。

「セイバー、引きずらなくても良いだろお……？」

「全く、マスターが中々起きてくれないのが悪いのですよ？」

「ふふふ、セイバーちゃんの言う通りね♪」

カノ姉様のおっとりした微笑みに魅とれてしまう。まだ誰にも言っていないけれど、私はカノ姉様に少し憧れています。

「ほらほらダイちゃん、早く朝ごはん食べちゃって」

「ふわぁ……へいへい」

マスターは欠伸をしながら席に着き、カノ姉様の作って下さった食事を食べてる。因みに私の朝食もカノ姉様で作って下さったのだ。

「じゃあ、行ってきまうす」

その後も色々ありつつ、マスターは無事に学校へと出掛けられた。

「ふう……手間の掛かるマスターです」

「ふふ、お疲れ様です、セイバーちゃん♪」

ソファに座り込んだ私に、カノ姉様がわざわざお茶を運んで来て下さった。

「ああ！ カノ姉様はご自分の仕度をなさってください！」

「良いのよーセイバーちゃん、今日はお店お休みだから♪」

カノ姉様は自分のお店を持っており、普段はそのお店へ行かなくてはいけない時間だったのだ。

「そうだったのですか、では尚更、今日だけでも体を休めてください！」

「あら、セイバーちゃんには言ってなかったけど、私は丈夫だけが取り柄なんですよお♪」

カノ姉様には申し訳ないけれど、とてもそうには思えません。そう心で呟いてしまった私の無礼を、どうか許してください。

「うう、とにかくカノ姉様はくつろいでいて下さい！ 今日の分の家事は私が全てやりますから！」

「そんな、セイバーちゃんにやってもらうだなんて出来ないわ、いつもダイちゃんの相手をしてくれてるんだもの」

カノ姉様、マスターに尽くすのは私の使命ですと、何度も言っただけです……。

「ではカノ姉様、買い物は私に任せてください！ 重い物を持つの

は大得意ですから」

「うーん……なら頼んじゃおうかしら♪」

ようやく私もカノ姉様のお役に立てます！ ……何て浮かれていた
ら、見事買い物先で道に迷ってしまいました。

「うう、此処はどこだろう……？」

途中まで順調だったのに、どこで間違えたのだろうか……。そして、
道の真ん中で途方に暮れていると、不意に話しかけて来てくれた子
がいた。

「お姉ちゃんどうしたの？」

見た目からして5歳くらいの男の子だ。

「お姉ちゃんね、道に迷っちゃったの」

「えー！ お姉ちゃん迷子なの？」

改めて言われるとちょっと恥ずかしいな……何て思ったけど、本当
の事だからと思い、この子に道を聞いてみる事にした。

「スーパーならそこだよ？」

「あ……以外と目の前にあったんだね」

ちょっと拍子抜けな感じもしたけど、無事に辿り着けた安堵の方が
上回った。

「ありがとうございました！ 君のお陰で助かりました♪」

「えへへ♪ 変な姉ちゃん〜！」

お礼を言うと、男の子は照れながら走り去って行った。その小さな背が見えなくなるまで見送ると、私はスーパーに入り、メモに載っている物を悪戦苦闘しつつも、無事に買えたのだった。

「あら、セイバーちゃんお帰りなさい♪」

「た、ただいま帰りました……カノ姉様」

不覚にも、帰り道でも迷子になってしまい、家に着いたのは夕方になってしまいました……。

「おかえり、セイバー……て、何でそんなにボロボロなんだよ？」

驚いたことに、マスターが学校から帰って来てしまっていた。それを見て、心の中で小さくため息を着いた私だった。

「ははは♪ セイバーは方向音痴なんだな〜！」

「うう……面目ないです」

その日の夜、私はマスターに笑われてしまった。それにカノ姉様の家事を手伝うどころか、買い物のできで結局何一つ手伝えなかった。

けど、それでも今日は素敵なお会いもあり、悪い事ばかりではなかったな、とあの男の子の顔を思い浮かべていた。

十章 『大切な人—SaberOrDog?—』 (前書き)

これはFate／StayNightのファンフィクション (二次創作) です。

十章『大切な人―Saber Or Dog?―』

家に帰ってくると、おぞましいまでの憎悪を感じ取った。それは今まで生きて来た中でも、感じたことのないほどに大きく、渦々しいものだった。

「何だ……この感じ？」

「……マ・ス・ター？」

ビクッと身体が震え、後ろを振り返るとそこには廃人化したセイバーの姿があった。

「どうしたんだよ、セイバー？」

「どおもおしいてえまあせえんよお」

いや、喋り方が普通ではないのだが……とツツコミを入れている場合でもなく、今日遠坂と話してわかった事やこれからの事も考えなくてはいけないのだ。

「セイバー、ふざけてる場合じゃないんだ、急いで決めなくちゃいけないことがあるんだ……」

「ほえ？ 決めなきゃいけない事って何です……？」

「私も気になります、マスター」

いつの間にかエリザまで来ていた。まあちょうど良いと云えば良い

のだが。

「今日、遠坂と話して色々と感じたんだ。この戦いの事とか、聖杯の事とか。それで俺の結論から言わせてもらえば、これまで通りでいきたいと思う」

「それでは聖杯を手にする事は出来ませんよ、マスター？」

確かにエリザの云う通りだ。これまでの俺達は、敵を退けるだけであり、決して殺しはしてない。だがそれではこの戦いは終わらないし、勝ち残れない。

「だからと言って、俺はお前達に人殺しになって欲しくない……！」

「私達は既に人殺しですよ、マスター？」

セイバーの顔つきが変わった。真剣な顔と言うよりは、ホントに悲しそうな、とても色の無い顔。

「それって……」

「マスター、私はジャック・ザ・リッパー。……殺人鬼ですよ？」

俺の声を遮るように、エリザの冷たい声が聞こえて来た。

「でも、それは生前の事であって……」

「それでも私の罪は消えません……だからどうかお気遣いなく、私で敵を斬ってください。」

何も言い返せなかった。俺の決意ってのは何だったんだろうか、つい自暴自棄に陥りそうになる。

「マスター、ここに居たんですね」

あの後、俺は家に居ずらくなり近所の『あの公園』へと逃げ込んでいた。

「セイバー」

そこに現れたのはセイバーだった。セイバーは優しい笑顔で微笑んでいる。何故かそれだけで、俺の心は満たされていた。

「マスターの思い、私は嬉しかったですよ？ それに、エリザさんだってマスターの事を思ってたんだと思いますし」

「分かってる、分かってるんだけど……分かったからこそ俺は自分が嫌になったんだよ……」

そう、俺はセイバー達に人殺しになって欲しくない訳では無く、自分が人殺しになりたくないだけだったのだ。

「俺は自分が……」

「だから私達がいるんですよ、マスター」

セイバーは俺の思いを察したのか、先回りしてそう言ってくれた。

「マスターみたいな優しい人の為に、私達が剣になるんです」

それは余りに救いようのない、サーヴァントの存在理由だった。マスターの代わりに『人を殺す』それが本当に彼女達の存在理由だと言うのなら、何て悲痛な存在だろうか……。

「だからマスターは私達に指示して下されば良いのです。敵を討て、と。」

そんな事出来る訳がない。そんなのは卑怯だ。自分はただ命令するだけ。そんなのはただの卑怯者だ。

「それなら、俺はサーヴァントを否定してやるよ……！ そんな悲痛な存在理由は、否定してやるよ……！」

とにかく叫んだ。自分を奮い立たせる為に叫んだ。二度と『決意』が揺るがない様にする為に叫んだ。

「マスター？」

「もう迷わないさ、何を言われようが迷わない！俺はお前達に人を殺せだなんて指示するものか！」

この発言はセイバー達の存在理由を否定している事になってしまふ。だけど俺は間違った事を言っているとは思わない。

「セイバー達には悪いけど、俺はこのままの俺でいるよ」

「……ありがとうございます、やっぱりマスターが私のマスターで

よかったです」

ーギュッ

セイバーの身体が俺を包む。初めて感じたセイバーの温かさに、俺は少し気恥ずかしく思いながらも、身をゆだねた。

「マスター……」

セイバーの甘く、愛らしい声が聞こえる。俺は顔を上げてセイバーと向き合う。お互いの目を見つめ合うと、何だか急に照れてしまう。けれど、今はそれ以上に愛おしさを感じてしまう。

「セイバー」

そっと顔を近付ける。次第に縮む距離を感じつつ、目を閉じた。

「んっ……」

柔らかな感触を感じて、そっと目を開けると、そこに居るのは照れた顔のセイバー……では無く、『犬』だった。

「うわぁっ!!」

余りの驚きに、俺は思わず尻餅を着いた。

「全く、何を二人で良い感じになってるんの？」

「エ、エリザさん?!」

セイバーも同様に驚いている。そしてエリザは何処から連れて来たか分からない犬を離すと、俺達の方へ向き直り、いきなり説教を始めた。なんと、その説教はその後1時間以上続くのだった。

十章『大切な人—SaberOrDog?—』(後書き)

感想、ご意見等、随時絶賛募集中です♪

コメント返し率はかなり高いです！

では！

十一章『彼の願い―HeartBreaker―』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

十一章『彼の願い―Heart Brake―』

「マスター！ 朝ですよ♪」

まどろみの中で、セイバーの優しい声が聞こえてくる。今日もまた、平和で穏やかな一日になる事を願いつつ、俺は身体を起こした。

「おはよう、セイバー」

ぼやけた意識が段々とハッキリしてくる。それと同時にセイバー、そしてエリザの顔をしっかりと確認できる。

「どしたの、マスター？ 私の顔じろじろと見ちゃって♪」

相変わらずエリザの挑発的な態度や思考に、変わりはない。まあそこが良い場所であるのかもしれないが。

「いや、そんな見てないよ」

反応に困った俺は、取りあえず返事だけして部屋を出た。

最近の悩みといえば、悲しいことではあるが、自分の家で落ち着け無いことだ。セイバーとエリザには、聖杯戦争では命を守ってもらっているが、普段の生活では、かなり俺の命を削られていると言えよう。

「はあ」

「あら、ため息なんか着いて、どうかしたの？」

昼休みの屋上、最近はもうここへ来るのが当たり前になっていた。その為『遠坂凜』とは友好的な関係にもなれたので、別段悪いことでも無い。

「ちょっと家に帰るのが億劫になっててさ」

「セイバーと上手くいってないの？」

「いや、問題はセイバーだけじゃなくて、アサシンの方にもあつてさ」

俺がそう告げると、遠坂はやけに厳しい顔つきになった。

「あんた、アサシンのサーヴァントに狙われてんの？」

言うってから気付いたが、アサシンが来たのをまだ遠坂に言っていなかった。

「違う違う、新しくアサシンとも契約させられたんだよ」

「はあ?!」

今まで1番大きな声を出された。正直今のリアクションは芸人並にオーバーな感じがした。

「あんた……それってつまり、セイバーとの契約を破棄した事にな

るのよ？」

今度は俺が大声を出して驚いていた。でも確かに考えてみればセイバーも複数契約は出来ないとか言っていたような気がした。

「ちょっと待てよ、それじゃセイバーはどうなるんだ？」

「こんなの前例が無いから分からないわよ……はあ、どうしてこうなる訳？」

遠坂の呆れ具合は最もだろう。当事者である俺ですら、いまさら呆れ返っているのだから。

「このままじゃセイバーが消えちまうとかってあるのか?!」

「もしかしたら、最悪そうなる事もあるんじゃないかしら……」

それは正に最悪の事態だ。そんな事になってしまったら、俺はきつとおかしくなってしまうだろう。

学校からの帰り道、ふと見た腕の令呪に異変が起こっていた。紋章の形が変わっていたのだ。それは段々と紋章の線が消えている結果なのだと悟る。

「嘘、だろ……?」

妙な不安と悲しみが俺を襲う。とにかく急いで帰らなくてはいいけない気がしている。

「セイバー！」

家へ帰って早々、俺はセイバーがいるはずの自室へと駆け込んだ。が、そこにはあっけらかんとした表情でケーキを頬張っているセイバーがいた。

「ん！ んんあー（マスター）」

口いっぱいにケーキが入っているせいで何を言っているのか聞き取れない。しかし今はそれどころではない。

「セイバー大変だ！ このままじゃ、俺とお前の契約が、破棄される……！」

セイバーも目を見開いて驚いている。そして急いでケーキを飲み込み、わなわなと震え出す。

「やっぱり駄目なんですね……」

唇を噛み締めながらセイバーが呟く。そして、その後訪れる沈黙。改めてセイバーを見ると、俺は胸が苦しくなる。

「もっと一緒にいたいのに」

こぼれ出した本音。気恥ずかしさすら感じることの出来ない程に、今は余裕がない。

「私ものです、マスター」

涙目で見てくるセイバー。俺は堪らず抱きしめた。怯えて震えるセイバーに、戦士としての気迫は感じられない。今はただの女の子だ。

「な〜に昼間から抱き合ってるのさ」

不意に、背後からエリザの声が聞こえた。元はといえば、エリザが俺と無理矢理契約を交わしてしまったからこんな事に……そんな事を考える自分が嫌になる。

エリザに事情を話すと、意外にも冷めた反応を見せられた。

「ふ〜ん、消えるんだあ……なら好都合かな〜♪」

「なっ?! エリザ……元はといえば、お前が勝手に……!」

「マスター! 止めてください……」

つい言いかけてしまった最低な言葉を、セイバーは瞬時に制してくれた。

「マスターは私なら消えていいって考えているの?」

「違う! 俺はただ、ずっと皆と一緒にいたいだけだ!」

それが俺の願い……だった。

——ドサッ

いきなりセイバーが足元から崩れるように倒れたのだった。

十一章『彼の願い－Heart Brake－』（後書き）

感想絶賛募集中です！

十二章『狂戦士―Berserker―』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

十二章『狂戦士―Berserker―』

倒れたセイバーを寝かせつけ、俺とエリザは『遠坂』を探した。この聖杯戦争において、唯一頼れる人間は彼女しかないのだ。

「待っていてくれ、セイバー」

そう呟き、自分自身を鼓舞した。と、その時だった。見知らぬ男と目が合う。

「ああ……」

人の溢れかえる交差点で、一際目に付くその狂った目、そして額の『令呪』一瞬でこの男がマスターなのだと分かる。

「あ、あああ……」

万が一こんな所で戦闘にでもなれば、その被害は甚大だ。そう考えた俺は、咄嗟に近くの広場へと移動した。

「くっ……やっぱり着いて来たか！」

人数が少ない広場であるが、誰もいない訳ではないのだが、なぜか広場には誰もいない。以前から感じていた違和感ではあったが、恐らく一般の人間は、サーヴァント同士の戦いをどこかで察知し、本能的に避けているのだろう。

「ああああああ……！」

男の狂った叫びに呼応して、3メートル近くあるだろう巨体が空から現れた。

ードーンッ！

強烈な地響きと共に、巨体が地へと降り立った。

「＃＊Ｙ％\$！！」

声にならない異様な叫びと共に、俺の体は宙を舞った。肋骨が粉々になったであろう衝撃。恐らく俺はあのサーヴァントの拳をもろに受けたのだ。

「ごはっ！」

口から大量の血が吹き出た。もうろうとする意識を何とか繋ぎ止めるようにするが、頭がぼーっとし、それを阻止する。

「＊％Ｙ％\$＃」

尚も敵サーヴァントは迫ってくる。その姿はまるで『化け物』だ。そんな恐ろしい姿に、死をイメージさせられた。

「はああ……はああ……がはっ！」

口の中が鉄の味で支配される。いっそ死んだ方が楽になるだろうと考えてしまう程に苦しくてしんどい。

「はあはあ……ぐっ！」

声が出せない。思わず頭の隅でセイバーを思い出してしまう。

「ハアアア……」

目前まで迫る敵サーヴァントの息遣いが聞こえてくる。改めて見ると、その強大さ目が霞む。

「マスター！」

俺の虚ろな目に飛び込んで来たのはセイバーでは無く、エリザだった。必死な顔で俺の事を呼んでくれるエリザに、いつもの挑発的な感じはない。

——ドッドドッド！

エリザの姿を確認すると同時に、敵サーヴァントは猛突進していく。巨体に似合わずもの凄い速度でエリザに迫る。

「ちっ、あなたに構ってる暇は無いんですよ！」

エリザは突進を避けつつ、自慢のナイフで二度三度斬り付けた。が、あまり効果は感じられない。

「#¥%\$！」

言葉で表せられない叫びと共に、巨大な拳がエリザの左腕から左半身全体へと直撃する。

——ゴキヤツバギバギ!

骨が完全に破壊された不快感がダイレクトに耳へと入って来た。

「うぐっ……かはっ!」

あのエリザが痛みでもがいている。俺はさっきより楽になった体を何とか起こした。腹部に妙な違和感を抱えながらも、何とか歩ける。

「情けないですよ……エリザさん」

苦痛で歪む視界の先に、見馴れたシルエットが浮き上がっている。そう『セイバー』だった。

「なっ……セイバー?」

「遅くなり、すみませんでした……マスター」

辛いのは目に見えてい、それでも気丈に振る舞おうとしているセイバーが、いつもよりも何倍も大きく見えてしまう。

「ああ……」

敵のマスターが何かを呟く、するとサーヴァントは再び俺の方へ猛スピードで突っ込んでくる。

——ガシーン!!

何と、セイバーはあの突進を剣一本で受け止めている。その背には小刻みの震えが見える。身体が思い通り動かないであろう中を、セイバーは今必死で踏ん張っているのが分かる。

「くっくううう……!!」

だが、無情にもタイムリミットは訪れてしまった。腕に高熱を感じたと同時に、セイバーは頭を押さえながら膝を付く。

「うう……!!」

「セイ……バ……」

――ブンッ！　ズザーッ！

敵サーヴァントがセイバーの頭を掴み、そのまま投げ捨てた。地面を深くえぐる様に飛ばされたセイバーは、そのまま動かなくなってしまった。その直後、腕に刻まれたはずの令呪を感じ取れなくなっていた。

十二章『狂戦士―Berserker―』（後書き）

感想やこうしてほしい！という要望等を随時募集中です！

あと、オリジナルキャラクターなども♪

十三章『狂気と共に―Jeanne d'Arc―』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

十三章『狂気と共に―Jeanne d'Arc―』

「もう……やめてくれ」

あまりの惨状に、思わずこんな言葉がこぼれ出していた。

「ウウウウウ……！」

敵サーヴァントの唸る声が聞こえてくる。逃げなきゃ殺される。そうは思っただけでも、どうしようもないほどに圧倒されている。

「来るなら来なさい……化け物！」

満身創痍のエリザが敵の前に立ち塞がる。皮膚だけで繋がっているんじゃないかと思うほどにぶらぶらとしている左腕、呼吸する事すら辛そうに感じる息遣い。

「エリザ、もう良いよ……」

「諦めるんですか？ セイバーを助けるんですよ！」

ドキッとした。いつの間にか俺は『諦める』事を最善だと思ってしまっていた。確かにこの状況では、何をしてでも打開出来とは思わない。だからと言って諦めるのが最善だとも言えない。

「ありがとう、エリザ……」

落ち着きが戻って来た所で、状況を整理してみる。相手のサーヴァントは恐らく、マスターに『真名』を授かってない。つまり100

%の力は出せていない。ならばそこへ付け込む隙がある。

「エリザ、距離を取りつつ態勢を整えるんだ」

――サツサツ

致命傷を負っているとは思えない程の軽快なステップに、敵サーヴァントは翻弄されている。その内に俺はエリザの情報を整理する。

「エリザ、お前の力の名はなんだ？」

「切り裂く者の悲劇―クリムゾンチャペル・マ―ダー―です、マスタ―！」

力の名を聞くと、不思議と一瞬でその力について理解できる。『クリムゾンチャペル・マ―ダー』その効力はかなり特殊だ。エリザが所持する二本の大型ナイフから、今までに斬った者の血が継続するだけの力。

「我がサーヴァント、エリザ・ジ・ジェニスの力、ここに示されよ！」

――ズウウウ

鈍い低音が辺りに響き渡る。とその時、エリザの右手に持っているナイフが血に染まりだし、刀身を完全に赤く染めた後、血が地面へと垂れ始めた。

「クリムゾンチャペル・マ―ダー」

エリザの冷たい声が聞こえ出すと、辺りに異様な殺気が立ち込め始めた。

「*%#¥\$¥%！」

敵サーヴァントもその殺気に当てられてか、異様な叫びを放つ。が、エリザは構わず敵に向かって高速移動を始めていた。目にも留まらぬ速さで次々と敵の身体に傷を与えていく。

「はあはあ……これで貴方もおしまいね」

最後に敵を一瞥してエリザがこっちに戻って来た。その勇ましくも恐ろしい姿に、マスターである俺ですら恐怖を感じる。

「決まった、のか？」

「恐らく致命傷は無くとも、血に含まれた猛毒で動けぬまま絶命します」

その説明でようやく恐怖から解放された。……はずだった。

「*#\$%¥*%*#!！」

――グシャッ！

あの叫びが聞こえた瞬間、俺の視界からエリザが消えていた。そしてエリザの代わりにあるのは敵サーヴァントのこん棒だった。

「エリザ……」

弾け飛んだ血しぶきは、俺の身体をも赤く染めた。目の前で起きた

出来事のはずなのに、未だ信じられない。いや、現実なのだと認めたくない。

「あ……ああ……ああああああああ！！！」

俺は発狂した。恐怖や罪悪感、人の心にかけられる感情の負担がメーターを振り切って、心が壊れた。

「ああ……エリ、ザ……」

涙が頬に着いた血と共に流れ出す。そしてそのまま地面の血溜まりへと同化していく。敵のサーヴァントが再び動き出そうするが、エリザの宝具のお陰で満足に動けないでいる。

「あ、あ、あ……」

だが俺は逃げる事も出来ずにへたりこんでいるしか出来なかった。

「はっはっはっは！ 残念でした」

不意に聞こえてくるおどけた声。

「お前、俺が異常者で喋れないと思っただろう？ 残念だけど、俺はまともなんだよ！！ だからサーヴァントの真名だって解いてやった……つまり、俺のバーサーカーは宝具だって使える、力だって100%出し切れるんだよ！」

サーヴァントを失った俺にとっては、もはやどうでも良い情報だった。

「さあ毘沙門天よ、止めをさせ！」

『毘沙門天』かつて鬼神と呼ばれた名将『上杉謙信』が崇拜していたと云われている仏教ではお馴染みの神の名だ。それが今や狂戦士^{バーサーカー}等と呼ばれている。相手は神、勝てないのが道理であると言えよう。例えば、生前有名な殺人鬼であろうが、セイバーと言う優れたサーヴァントと言えど、神に対しては穀潰し程度にしかない。

「……ああ」

もし今、こん棒を振り上げているサーヴァントが神だと言うのなら、是非助けて欲しいと切に祈る。

「……ない」

セイバー、もしもまだ戦う気力があるのなら助けてくれ。

「……にたくない」

こんな俺をマスターと呼んでくれるのなら、いますぐ助けてくれ。

「死にたくない！」

毘沙門天のこん棒が振り下ろされていく。真っ直ぐと俺の頭目掛けて。

「セイバー！」

——カコッ！

ゆっくりと、閉じていた目を開いた。するとこん棒は一本の剣で、完全にその勢いを殺されていた。

「……セイバー？」

「マスター、セイバーではありません……私の真名はジャンヌ・ダルクです」

そこにはいつもと変わらぬ笑顔があり、いつもとは違う狂気が漂っていた。

十三章『狂気と共に―Jeanne d'Arc―』（後書き）

感想はお気軽に♪

オリジナルキャラクター案急募中?!

十四章『狂気の聖女―Crisis Saber―』（前書き）

これはFate／Stay Nightのファンフィクション（二次創作）です。

十四章『狂気の聖女―Crisis Saber―』

「ジャンヌ・ダルクです」

それがセイバーの、彼女の本当の名前だった。『ジャンヌ・ダルク』その名を知らぬ者はあまり多くはないであろう人物だ。

「……セイバー」

すぐにでもセイバーの真名を呼ばなくてはいけない状況だと言うのは分かる。だが何故か呼んでしまっただけはいけないような気がしてしまふ。

「マスター！」

セイバーの急かす声が聞こえる。もう猶予は無い。どんなに恐れていても、もう言うしか無い。

「ジャンヌ……ジャンヌ・ダルク……！」

――ズクンッ！

場の空気が変わり果てた。俺や敵を取り囲む様に炎の柱が上がり、誰もここから逃げ出すことが出来なくなった。

「聖女の断末魔―デッド・オブ・マリアー」

ジャンヌの変わり果てた声が聞こえた。いつもの可愛らしく、明るい感じの声では無い。戦闘中の頼もしい声でも無い。言うなれば、

その真逆だ。冷たく、冷徹な声色に、喋り方。

「*%¥#\$!~!」

いつの間にか敵サーヴァントは、十字架に貼付けにされていた。金色に輝く十字架には、そこかしこに血糊が付着している。

「ジャンヌ……こ、これは、お前の力、なのか……?」

「力……? 違いますよマスター。こんなのは呼吸の様なもの、能力のほんの一部ですよ」

そう語るジャンヌの姿が、しだいに変化していく。淡い桃色の髪は白銀へと変わり、髪の毛と同じ桃色だった鎧も白銀へと変わる。

「……これが、本当の私です」

こつちが焼け付きそうなくらいの灼熱の炎の中、ジャンヌは涼しそうな顔をしながら、もかく毘沙門天へと一瞥し、真っ暗な闇に包まれた空へと右手を伸ばした。

「聖なる神よ、今こそ我に光を指し示したまえ……神光の剣―エクシ・マリアー」

ジャンヌが自らの宝具の名を唱え終わると、暗黒の空から一筋の光が射し、光がジャンヌを包んだ。

――ゴオオオオオ!

すると、ジャンヌがかざしていた右手には、一本の剣が握られている。細身ではあるが、その刀身から溢れ出る神々しい光が、剣の凄

みを物語っている。

「神よ……この哀れな戦士に、死の裁きを与える事を許したまえ」

ジャンヌは胸の前で十字を切ると、宝具である剣を構え、駆け出した。

「はあああああ！！」

だが、それとほぼ同時に相手のマスターが何かを叫んだ。

「宝棒羅刹！」

すると毘沙門天を拘束していた十字架の上に、黄金のこん棒が降って来た。そして、その勢いで拘束していた鎖が外れ、毘沙門天は黄金のこん棒を手に取り、目前に迫っていたジャンヌへと振り下ろした。

「そんな物で私は止められませんよ」

そう言い捨て、ジャンヌは毘沙門天を斬り裂いた。

――ズシャツ！

毘沙門天であったモノのシルエットは、上半身と下半身とで半分になって崩れた。それは余りに一方的な暴力であったと言えるよう。

「毘沙門……天！」

サーヴァントが消えると同時に、相手のマスターも地面へと突っ伏

し、跡形も無く消え去って行った。

「はぁはぁ……セイバー？」

「もうセイバーでは無くなりました……今の私はクライシスセイバー、壊れかけのセイバーですよ」

自嘲気味に笑うジャンヌは、そのまま地面に倒れ込んだ。

「何だよ、何がどうしちゃったんだよ！」

状況の整理も出来ぬまま、寝間苦しい速度で移り変わる状況に、苛立ちと焦りがついに爆発してしまった。

十四章『狂気の聖女―Crisis Saber―』（後書き）

疑問や質問などが多くなりそうな章でしたが、聞いてくれれば出来るだけ答えますので、どうぞ気軽に♪

十五章 『炎獄の輪廻－Witch Hunt－』 (前書き)

これはFate／StayNightのファンフィクション (二次創作) です。

十五章『炎獄の輪廻―Witch Hunt―』

目を開けると、いつの間にか俺は貼付けにされていた。そして足元からは、次第に強くなる炎が迫って来ていた。

「助けてください！ 私は魔女なんかではありません！」

俺が叫んでいるのか？ いや違う。この声はジャンヌのものだ。つまり、これはジャンヌの記憶だ。

「熱いっ！ 助けてえ！ 熱いです！」

狂ったような声、それもそのはずだ。灼熱の業火はすでに足を覆い尽くしている。熱さと痒みで頭がおかしくなる。皮膚が焼けただけるのが分かる。

「魔女めっ！」

「魔女なんて焼け死ね！」

様々な人達の怒号が炎をさらに強大に、凶悪にしていく。

「いやああああ！！！」

苦しみ、もがくジャンヌの声。炎はすでに彼女の下半身を覆い込み、胸元へと来ていた。

「私が何をした！ 国の為、民の為、私はこの身を尽くして来たの

に！ ……きやあああああああああ」

断末魔が響き渡り、ジャンヌは絶命した。焼け付いた彼女の亡きがらから一滴の『黒い涙』が流れていた。

「……！？ はあはあはあ……」

全身に酷い量の汗をかきながら目が覚めた。辺りを見渡すと、そこは見知らぬ場所であることだけが分かった。

「大丈夫？」

不意に、横から遠坂の声が聞こえた。

「遠坂……」

半ば放心状態で遠坂を見続けてしまった。そんな俺を見て、遠坂はゆっくりと語り出した。

「貴方、酷い状況だったのよ？ サーヴァントは死にかけてるし…
…もう一人の方は大丈夫そうだけど、目を覚まさないし」

死にかけているのは恐らくエリザで、もう一人は『ジャンヌ』だろう。あの後で遠坂が俺達をここまで運んでくれたのだろうか。

「悪かった、手間掛けさせて……」

「手間あ？ あんたね！ 私に謝る前にサーヴァント達に謝りなさいっ！ 何なのあの戦いは……私に勝ったときのあなたは、もっともっとキレ者だったはずよ！」

遠坂の言葉にハツとした。確かにさっきの戦いで俺は、ただ怯えるだけのちっぽけな存在だった。ジャンヌやエリザに護って貰える事にあぐらをかいていた……。

「確かにその通りだよ、遠坂」

「分かったって言うなら、早くサーヴァント達の所へいきなさい！」

――ダッ！

俺は遠坂の言葉を最後まで聞こうともせず、とにかく飛び出していた。

遠坂の家、と言うよりは屋敷と言った方が合っているが、とにかく広い。初見では絶対迷子になるだろうが、俺とサーヴァントとは、契りの繋がりでどこにいるのかが分かる。

「繋がりが強くなったって事なのか？」

良く見れば、右腕に刻まれた令呪は以前よりも、さらに複雑に絡み合う様な模様で強く刻まれている。それは多分ジャンヌもエリザも俺のサーヴァントとして認められたという証だろう。

――ガチャッ！

ジャンヌ達がいるはずの部屋の扉をゆっくりと開けた。不安と焦り

が入り交じる心を落ち着かせながら辺りを見渡した。

「あ、マスター！」

初めに目が合ったのはジャンヌだった。今の彼女に、あの時の狂気に満ちた感じは感じ取れない。

「目が覚めてたのか」

「はい、まだ身体が軋むような感じは取れませんが」

そう言ってほくそ笑むジャンヌの姿に、心からの安堵を感じつつ、隣のベッドで寝たきりのエリザが気掛かった。

「ごめんな……エリザ」

「なあに謝ってんのさ、私ならへーきですよ！ マスター♪」

突然寝ていたはずのエリザが目を覚まし、こちらを向いた。

「良かった……！」

思わず涙が吹きこぼれてしまった。こうしてまた、俺達の繋がりは深いものになっていった。

十五章『炎獄の輪廻―Witch Hunt―』(後書き)

感想など受付中です！

十六章『狂気と成長―UBW―』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

十六章『狂気と成長―UBW―』

すっかり良くなっていたエリザに、心からの安堵と疑問を抱いた。あれだけ無惨にやられたと言うのに、彼女は既に全快に近い状態で回復している。いくらサーヴァントと言っても、この回復力は異常だ。

「ジャンヌ、聞きたいことがある」

「ん？ 何ですか、マスター？」

俺にはある一つの考えがあった。エリザの傷がこの異常な速度で治ったのは、ジャンヌの力でのだろうと。

「エリザの傷を治したのは……」

「私ですよ、マスター。私の母なる癒し―エーテル・マリアーで治しました」

予想はしていたが、ジャンヌの力はまさに底無しだと言える。攻撃面で優れた宝具だけでなく、こうしたサポート面にも優秀な宝具があるのだ。

「ジャンヌ、お前って……凄いサーヴァントだったんだな」

「忘れたんですか？ 私は壊れかけ、なんですよ？」

『壊れかけ』を強調した所に疑問と不安を抱えてしまう。ジャンヌ

が覚醒した後も彼女は自らを壊れかけと語っていた。

「壊れかけて、どう言う事なんだよ？」

「言葉の通りです。セイバーとして壊れているって事です。」

どうもジャンヌが一人で自己簡潔してしまっている印象を受けてしまう。そして意味深な言葉。壊れかけているのはセイバーとしてなのか、サーヴァントとしてなのか、そこさえも曖昧で、俺には判断出来ない。

「答えを曖昧にしてごまかさないでくれ……」

「……じゃあマスター、少しでも時間を下さい」

ジャンヌはそう告げて、俺の前から去って行った。最後に見せた不敵な笑みを見てしまった俺は、しばらく動けずにいた。あのタイミングでの笑みは不気味過ぎるし、何よりジャンヌらしくない。俺の目には、ジャンヌが狂っている様に見えてしまった。

「遠坂、俺に魔術を教えて欲しい！」

困惑する遠坂に向かって、俺は土下座をしていた。

「そう言われてもねえ……」

「そこを何とか頼むよ!!」

尚も引こうとしない俺に、遠坂は次第に困惑の色が濃くなりつつあった。だがそこへ助け舟を出した人物がいた。

「なら俺が剣術を教えてやるよ」

その人物とは、遠坂のサーヴァントであった。

「アーチャー？」

遠坂は少し面倒臭さそうにサーヴァントの名を呼んだ。

「大丈夫だ凜、お前に手間は掛けさせない」

少し笑いながらアーチャーは言い放った。すると遠坂もその条件を呑んだようで、再び面倒臭さそうな顔を浮かべながら部屋を出て行った。

「よし、早速始めるぞ」

アーチャーが何かを呟くと、世界は一変した。辺り一面が焼け野原となり、俺とアーチャーが立つ地には幾千と言うほどの、数多くの剣が突き刺さっている。

「アンリミテッド・ブレイド・ワークス……これは俺の力の一つだ」

次第に、身体が重くなる様な感覚に陥る。

「この結界内では全てが俺優位に事が進む……修業には打ってつけだと思わないか？」

「ははは……」

覚悟とは裏腹に、余りに重くなる身体に一抹の不安と、修業に対する恐怖心が芽生え始めた……。

外伝『願い—King of Soldier—』(前書き)

これはFate／StayNightのファンフィクション(二次創作)です。

外伝『願い-King of Soldier-』

気持ちの良い風に吹かれながら、静かに空を仰ぎ見てみる。そこにはあの頃と変わらぬ蒼い空が広がっている。

「士朗……待っていてください」

破壊したはずの聖杯によって、我がマスターである『衛宮士朗』はこの世から消されてしまった。いや、正確に言うならば吸収されてしまったと言える。聖杯戦争において最後の勝者となり、聖杯を破壊する事を決めた。だがそれを実行した後、士朗は聖杯へと引きずり込まれてしまった。

「何が悪かったと言うのだ……」

思い出すたび、私は拭えぬ後悔に身を委ねてしまう。だが今、私は今一度の聖杯戦争へと身を投じられてしまった。その原因は分らないが、どうやらここは固有結界の中らしい。そしてこの結界の中では、前回とは比べものにならぬくらいに多くのサーヴァントを感じる。

「今度はそう簡単に勝ち残れそうもないな……」

前回だって簡単に勝ち残れた訳では無いのだが、今回は敵の数そしてサーヴァントが放つ力の質があまりに違いすぎる。

「貴女……セイバー？」

不意に背後から声が聞こえた。どこか懐かしく、身に覚えのある声であった。

「遠坂凜……なのですか？」

前回の聖杯戦争では、彼女の助力無くしては勝ち残れなかった。そして何よりこの状況で知り合いに会えたのはとても心強い。

「やっぱりセイバーね♪ 久しぶりじゃないの」

「あまり変わらないですね、凜は」

そこが気になってしまう。前回からどれほどの時が過ぎたのだろうか。少なくとも数年は経っていてもおかしくない。聖杯戦争がそこまで頻繁に行われるなんて前例は存在しない。そしてあってはいけないのだから。

「あのねえ、人ってのはそんな短期間で変わるものじゃないわよ」

「短期間？」

「ええ、だって貴女と衛宮士郎が消えてからまだ二ヶ月しか経っていないもの」

二ヶ月、やはり私の推測は間違っていないなかった。だからこそその不安と困惑を感じてしまう。

「凜、あなたは何か違和感を感じないのですか？」

「何よ、違和感って？」

疑心暗鬼。そんな言葉が今の私には相応しいと思ってしまう。今の物言いに対して、私は何故だか凜に対して不信感を抱いてしまったのだ。

「あなた……凜ではありませんね」

「何を言い出すのよ!？」

一歩身を引き、凜の姿をした何者かから距離を取る。そして『風王結界ーインビジブル・エアー』を構えた。インビジブル・エアは不可視の剣であり、敵から間合いを見切られないのが最大の特徴である。その為正体不明の敵に対しての牽制にはかなり有効である。

「さあ、素直に正体を見せてください」

「全く……面倒なサーヴァントだよ!」

そう叫ぶと、凜の姿をした敵は巨大な剣を何もない空間から取り出した。自らの身長と同じくらいの長さの剣は、私の目には余りに無骨で滑稽に写る。

「それほどの大きさ、扱うのは不可能で……」

ーズガアアアア!!

突如として振り抜かれた大剣に、私の身体は持って行かれていた。間一髪の所でインビジブル・エアで受け止めはしたが、大剣の勢いの前では余り意味が無かった。

「くっ！ 見掛けによらずの馬鹿力ですね……」

「それほどでもないわ♪」

不敵な笑みを浮かべてくる凜の顔は、今となれば本人とは全く別の顔だった。

「あなたは……何者ですか？」

「私はソルジャー、究極のサーヴァントにして、初代聖杯戦争の覇者よ」

『ソルジャー』その名を冠する者は、セイバーのクラスに置いての頂点に君臨していると言われている。そして初代聖杯戦争の覇者である事から、目の前にいる敵は、考えるまでもなく倒すことは不可能だ。

「さようなら……弱きセイバーよ」

そう言い残し、ソルジャーは私の頭目掛け大剣を振り下ろして来た。

「……士郎！」

最後に一度だけ、一度だけで良いから士郎に会いたかった……

Fin

十七章『崩れる世界－Answer Word－』（前書き）

これはFate／Stay Nightのファンフィクション（二次創作）です。

十七章『崩れる世界—Answer Word—』

どれ程の時間が経過したのかも分からないが、身体の疲労感は尋常ではない。膝がわなわなと震え、両腕は鉛の様に重い。

「かはっ！ はあああ……」

そして呼吸すらしんどく、自然に呼吸する事を忘れてしまう。これが人の限界であることを悟る。

「驚いた……まさかお前がここまでタフな人間だったとはな」

アーチャーが称賛の声を掛けてくるが、俺の五感は消え去り、立っているのか倒れているのかも分からない。

「とは言っても、もう限界だな」

そして俺の意識は途絶えた。死んだ人間がどのようなか何て分からない。だが今の俺は恐らく死んだのではないかと錯覚してしまう。

——キイイイイン！

剣と剣が激しくぶつかり合い、高い金属音を放つ。これは修業の時の記憶だろう。

「良い反応だ。やはりお前の瞬発力、そして行動予測は武器になるな」

「はあはあ……行動予測？」

確かに俺自身、瞬発力に関しては驚いている。あのアーチャーの剣を、本気では無いにしろ今まで受けきれていると言う事実がある。だがアーチャーの言う『行動予測』と言う単語には少し疑問も浮かぶ。

「そうだ、お前の行動予測は常人のそれを遥かに超越している」

――ギイインッ！

「ほらな、お前は無意識に俺の剣の軌道を予測している。そして、その瞬発力を活かして防いでいる」

確かに意識した事なんて無かった。だが意識してみると、途端にアーチャーの剣筋が僅かではあるが見え出してくる。

「くっ！」

――キイイイン！！

「今の感覚を完璧に自分の物にするんだ」

だがアーチャーの剣筋を意識的に見定める事が出来たのは、修業中

では今の一回だけだった。

まどろんだ意識が、次第に覚醒し始める。こんなにも目覚めの悪い日は今まで経験したことが無い。

「痛え……」

「大丈夫ですか、マスター？」

ジャンヌが顔を覗かせて来た。相変わらずの優しい笑顔に安堵を覚えつつ、妙な影を感じてしまった事に不安を覚えた。

「そうだ、エリザの具合はどうだ？」

「エリザならもう大丈夫ですよ、ただ戦闘に復帰するのはもう少し掛かりますけど」

やはり見た目の傷は癒えても、内側に蓄積されたダメージは癒えるのに時間がかかるらしい。それはジャンヌの宝具を持ってしても同じだ。

「なあジャンヌ、あのさ……」

——ザアアアアア!!

突如として、耳に強烈なノイズが聞こえ出した。すると遠坂家の屋敷は一変した。今までの華やかさは消え去り、突然廃墟へと変わったのだ。

「これは?!」

「逃げ、なさい……」

部屋の入口に、傷だらけの遠坂が倒れていた。俺は重い身体にムチを打ち、遠坂の元へ駆け寄った。

「どうしたんだ、傷だらけじゃないか!」

「アイツが……来る」

何が来るのか分からないが、遠坂がここまで傷だらけにさせられた相手なのだ。恐らく強敵なのは目に見えている。

「マスター、この感じは……あのサーヴァントです!」

ジャンヌの少し焦った感じから、相手は多分あの『セイバー』だ。

「くっ、行くぞ! ジャンヌ!」

「はい、マスター!」

しばらく屋敷内を走ると、中庭に着いた。だがそこは中庭と呼ぶにはあまりに広い場所であった。

「く、そ……」

そこには遠坂同様に、傷だらけのアーチャーがいた。

「邪魔しなければ死ななくて済んだものを……馬鹿な男」

「凜……悪い」

——ドタッ

アーチャーから生気が消え去った。

「アーチャー……!!」

中庭に俺の叫び声が響き渡った。

外伝『誓い—Never Give Up—』(前書き)

これはFate／StayNightのファンフィクション(二次創作)です。

外伝『誓い―Never Give Up―』

「さようなら……」

――キイイン！

物凄い重量に手が震えるが、ここでゲイボルクから手を放したら間違いない俺とセイバーは死ぬ。

「早く、逃げろよ……！」

「あなたは……ランサー？！」

リアクションは満点だが、早いところ本気で逃げてほしいと、心から願った。

「誰、あんた？」

不機嫌そうな声の主は、何処かで見たことのある人間の顔をしているが、全くの別人だと分かった。そしてコイツは『化け物』だと言う事も。

「ちっ！ 許せ、セイバー！」

――ドカツ！

余りに切羽詰まった状況に、いつまでも動揺しまくりのセイバーを蹴り、強引に距離を取らせることに成功した。

――ズドンッ！

次いで俺が身を引くと、ドデカイ剣が地面に減り込んだ。

「ズドンって……剣振り下ろした時の効果音ちゃうやろ」

思わず変な言葉遣いになる程衝撃を受けた。

「あなた……何でその出来損ないを庇った訳？」

「男がか弱い女守るのに、理由なんていらねーだろ？」

我ながら決まったと確信した。

「私も女だけど？」

そう返して来ますか、あなたは。とか言ってもいられず、敵が動き出そうと右足を前に出すのを俺は見逃さなかった。

――ザクッ！

「……！？」

敵の足元へゲイボルクを突き刺した。流石だ俺！

「あなた、少しはまともに戦えそうね」

まだ余裕な敵に、少々イラッと来た。が、ここで戦いを続行する程俺は馬鹿ではないのだよ。

――サツ！

僅かに出来た隙を付き、俺はセイバーを抱えて戦闘から離脱した。

「たく、俺に迷惑かけさせんな」

「すみません……」

全く目を合わせようとしなないセイバーの姿に、俺は少し真剣になってみた。

「アイツが何者なのかは分からないが、俺に勝った奴が情けない姿を晒してんじゃねーよ」

「あれは……」

「バーカ、結果的にお前の勝ちだろうが」

正直、何をこんなに落ち込んでいるのかが俺には良く分からない。
「どーしたんだよ？ アイツにやられた事がそんなにショックなのか？」

「いえ、あの者は自らの事をソルジャーだと語っていました……そして初代聖杯戦争の覇者だと」

「初代と来たか……そいつはまた随分と年季の入ったサーヴァントだな」

正直な所、初代王者であろうが何だろうが関係はない。現に俺の目の前にいるコイツだって前回の王者な訳なんだから。

「俺からしてみたら、お前だってアイツと変わりなく見えるぜ」

「全然違います、相手はソルジャーなのですよ……」

「だから、関係ねーよ！ クラスがどうか関係ねーだろ？ お前はセイバーでアイツがソルジャー、ただそれだけだろう？」

あまりにグダグダ言うセイバーに、俺はつい怒鳴っちまった。

「……あなたの云う通りですねランサー、ありがとうございます」

セイバーは何故か、どこか吹っ切れた様な強い瞳を向けてくる。まあ結果オーライとか云う奴だな。

「そうだぜ、いつまでもお前はムカつくくらい真っすぐな瞳をしてろ……その方がお前らしいからな」

俺はそう言い残して、マスターの元へと戻った。

ランサーの不器用ながらも温かい言葉で、私はようやく自分を取り戻せた。確かにソルジャーと云う敵は強大ではあるが、私にもセイバーと云う立派な名を授かっているからには、その名に恥じぬ様に戦い抜く事を、静かに誓った。

十八章『闇-Dark』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

十八章『闇―Dark―』

「久しいわね、弱きセイバー」

倒れているアーチャーの向こうに、あのサーヴァントの顔が見えた。以前対峙した時に見た妖艶な笑みを浮かべている。

「ジャンヌ、アーチャーを頼む」

「マスター、何を？」

驚くジャンヌを尻目に、俺は敵サーヴァントへと、一歩二歩近づいていく。

「ジャンヌ、母なる癒し―エーテル・マリアーを使うのにどれくらい掛かる？」

「発動自体してしまえば、後は待つだけです」

つまり発動させればいい。そして俺がやるべき事は、その発動までの時間稼ぎ。

―ダッダッ

俺は敵の左側から回り込む様にして移動する。その動きが一番良いと判断する。アーチャーから敵の視線を外せ、尚且つアーチャーの残した剣を取りにも行けるからだ。

「ただの人間がサーヴァントに勝てると思ったのか？」

剣を手にした瞬間、目の前にサーヴァントが現れた。だが不思議と俺は落ち着いていた。これはアーチャーとの修業の成果だろう。

——シュッ！

敵サーヴァントが軽く振って来た斬撃を避けた。見くびって手加減した太刀筋を読むのは、今の俺にとっては造作もないことだった。

「見えてたのは一振りだけ？」

——ズキンッ！

不意に、脇腹に違和感を感じた。いつの間にか剣の柄のぶぶんで突かれていた事に気が付いた。

「それが……どうした？」

「痩せ我慢は止した方がいい」

痩せ我慢、まさに凶星だった。剣を構えるのもやっとな程に痛む。そして最悪にも、敵は再び剣を振ろうと身体が僅かに動いた。

「くっ……！」

——ガシャッガシャッ！

その時、敵の両腕に見覚えのある鎖が巻き付いた。俺はそれを見て何とか後退する。

「ジャンヌ、助かった……」

「アーチャーの方はもう大丈夫です」

ジャンヌは敵を見据えつつ報告する。その目も口調も真剣で、敵の強大さを改めて痛感した。

「ジャンヌ・ダルク、それが貴女の真名だったんだ……ふふ、皮肉なものね」

「あなたも名乗って下さると嬉しいのですが？」

ジャンヌが敵を挑発する。だが以外にも敵はその挑発に乗ってくる。だがそれは自主的である。

「良いわ、教えてあげる……私の名はマリア・ボチカレーワ、以後御見知り置きを」

どこかで聞いたことがある名だった。『マリア・ボチカレーワ』確かロシアの軍人の名だった様な覚えがある。

「ではマリア、改めて戦いを……」

「ふふ、もう戦いは終わりよ」

ジャンヌの声は遮られてしまった。と、いつの間にかマリアは俺達の背後へと回っていた。

――ズシャッ！

間合いを取ろうとしたが、マリアの動きの方が早く、ジャンヌの左腕から鮮血が飛び散った。

「くっ……早い！」

ジャンヌの顔に焦りが出始めた。それはどこかマリアに対してではなく思えてしまった。

「一本の剣ーソ・シベリアー」

マリアの冷たい声と共に、マリアの剣が黒い光を放ち出す。嫌な感じと云うよりも、嫌悪感の塊が目の前に置かれた、と云う感じがあの光からする。

「全てを闇に……」

ーゴオオオオオ！

鈍い轟音と共に俺の視界から光が消え去った。

十八章『闇-Dark』（後書き）

まだまだオリキャラ募集中です♪

十九章『狂気を纏いし者―berserke―』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

十九章『狂氣を纏いし者―berserke―』

「力乏しきマスターよ、お前は闇の中で何を見る？」

冷たく、突き刺すようなマリアの声。ただ声だけが聞こえる闇の中。何も見えない、もしくはここには何も存在しないのではと錯覚する。

「――――！」

叫んでみたが、自分の声すら聞き取れない。どうやらこの闇は視覚だけでは無く、聴覚までも奪われてしまう様だ。

「やめてええ――！」

突然聞こえ出した悲鳴に、思わず身体がビクッと反応した。だが見回しても、その悲鳴の出所が分からない。ただただ深い闇が続くだけ。

「熱いっ！ 身体が焼ける……」

聴覚を奪われてしまったはずが、またしても声が聞こえる。バチバチと燃える木の音も同時に聞こえてくる。俺はこの声も、木が燃える音も知っている。これは俺のサーヴァントであるジャンヌの記憶だ。

「焼き死ね！ この魔女めが！」

「そーだそーだ――！」

そしてまた、この非難の声も覚えている。国の為、民の為に戦った聖女の最後は、あまりに悲惨で理不尽であったのだ。生前のジャンヌは夢の中で神からのお告げを聞き、自ら兵士になる事を決めたらしい。そしてそれからと云うもの、彼女は度々神からのお告げを聞き、フランスを勝利へと導いたと云われている。だがその行いに異議を申し立てた連中がいた。その頃、ジャンヌの活躍で徐々に追い込まれていたイギリスのある教団だった。その教団の連中はジャンヌが魔女であると唱え始めたのだ。

「あの女は神等と言っているが、それは真っ赤な嘘だ。あの女は魔術を用いて戦いに勝利して来たのだ！ これは無断で神の名を使った、言わば魔女から神への冒瀆である！」

それが教団の言い分であった。事実、ジャンヌが『神のお告げ』を聞いていたのかの真偽は定かではない。だが戦いに勝利していたのは魔術では無く、彼女自身の手腕であるのだが、当時の人間にとっては神への信仰心は異常なものであり、瞬く間にジャンヌは『魔女裁判』にかけられた。そして、降された判決は『張り付け及び火あぶりの刑』であった。

「私は国の為、民の為に戦った！ ……そしてこの行いの答えがこれなのですか？」

ジャンヌはただ焼かれるだけでなく、裸で張り付けにされ、その状態で丸三日放置された。その間、心なき外道どもがジャンヌに対して『魔術を使えない様にする』などと言った理由から、様々な辱めを受けた。

「神よ……これが私の償いなのですか？ それならば、何故……何

故私にお告げを……」

ジャンヌは自らの命が焼き切れるその瞬間まで神を、民を、そして世界を憎んだ。それが『聖女ジャンヌ・ダルク』の悲劇の最後だった。

――ジャンヌ

心の中で俺は彼女の名を何度も叫んだ。とその時、突如として闇が消え去り、俺の視界に光が戻って来た。が、その時見た光景に、背筋が凍った。

「がはっ……!!」

マリアの腹に深くえぐり込んだジャンヌの剣が見えたのだ。そして俺の横には変わり果てたジャンヌの姿があった。焼かれた様にボロボロの衣服に身を包み、紅く染まった眼光。その姿に聖女としてのジャンヌの面影は微塵も無い。

「憎い……殺す……憎い……殺す……憎い……殺す……憎い……殺す……」

何度も同じ言葉を繰り返し唱えるジャンヌは、まるであの時の『バーサーカー』の様だった。

二十章『信じたい気持ち―Last Answer―』（前書き）

これはFate／StayNightのファンフィクション（二次創作）です。

二十章『信じたい気持ち―Last Answer―』

「ジャンヌ？」

変わり果てたジャンヌの姿が、俺の目には物凄く悲しく映った。自分以外の人々の為に戦った聖女の末路が『バーサーカー』狂気の戦士だと言われてしまう。そう思うと、無性に悲しくなる。

「憎い……」

呪いの言葉を呟き続けるジャンヌ。俺はそんなジャンヌをただ見ているしか出来なかった。

「くっ……私の闇から抜け出すなんて」

突き刺さったジャンヌの剣を抜き捨てながらも、マリアは苦痛に顔を歪めている。腹部からは血が滲み出て来ている、身に纏う甲冑にもかなりの血がこびりついている。

「堕ちた聖女……ジャンヌ・ダルクの成れの果てがこの姿とは、あまりに滑稽なものだな」

苦痛に堪えながらも、マリアの眼光は死してはいなかった。否、むしろその鋭さを増してさえいた。

「私はこんな化け物と同等だと言われていたとはな……」

「同等、だと？」

マリアが自嘲気味な笑みを浮かべたのが見え、思わず、その言葉を復唱してしまった。

「私はロシアの女兵士だった。そしてある時、私は敵の捕虜となり捕らえられた。その時、私は剣一本で敵陣から抜け出し、ロシア領土へとたどり着いた。その功績を称えられてか、私はロシアのジャンヌ・ダルクと呼ばれた……」

ロシアの兵士であった事は知っていたが、まさか『ロシアのジャンヌ・ダルク』と称されていたとは知らなかった。

「あああああああああ！！」

マリアが語っている途中にも関わらず、ジャンヌは物凄い狂気を発しながら素手でマリアの懐へと飛び込んだ。

「ふん、誇りを捨てた者に勝利はない」

マリアはそう言い捨て、襲い来るジャンヌに二、三撃斬り込んだ。ボロボロになっていたジャンヌの身体から、生々しい鮮血が溢れ出した。

「殺すっ！！」

それでも尚、ジャンヌは向かっていく。今度は素手では無く『エクシ・マリア』を手に持っている。

――ズバンッ！

辺り一面に飛び散る血しぶき、その中心で斬り合う二人のサーヴァント。互いに一步も引かない斬り合いは、マリアが距離を取り終わりを告げた。

「化け物、だな……」

だが、マリアが受けた傷は最初の一振りだけで、後のジャンヌの剣撃は見事に避けられ、逆に斬られ続けていたのだ。

「憎……い、殺、す……」

血だらけになり、ふらふらと足元が覚束ないジャンヌ。

「次で完全に殺してあげる……」

マリアは静かに呟いた。とその瞬間、俺の中の何かが熱を帯び始めた。冷静に戦いを分析し続ける頭と、異常な程に研ぎ澄まされた感覚とが互いに干渉し合う。端的に言うならば、頭で考えた事を直ぐさま実行に移せてしまう状況であると言える。これはアーチャーとの修業の時に感じた感覚に、限りなく近い。

「……っ！」

次の瞬間には、俺の身体は風を切って動き出していた。よく武術の達人は回りの動きがスローにすら見えていると云われているが、今の俺はスローに見えると云うよりは、回りの物の動きが正確に予測できる。

「非力なマスター風情が……愚かだ」

ーブンッ！

俺目掛けてマリアの剣が振り抜かれる。が、俺にはその剣筋すらも予測出来てしまう。俺は剣が当たらぬ高さに屈みながら、そのまま突っ込んだ。

ードガッ！

「な……！？」

ラグビーのタックルの様な形で突っ込んだ俺は、マリアごと地に叩き付けられた。痛みを感じる間もなく俺は立ち上がり、マリアを見据える。流石にマリアも直ぐに体制を立て直す。が、ジャンヌの一撃で負傷した箇所からの痛みのせいか、一瞬隙が見えた。

「はあああああ！」

俺は先程抜き取っておいたアーチャーの剣を構えて走った。案の定マリアの反応は一瞬遅れ、俺の剣がマリアの傷口を貫いた。

「うぐっ！ ……キサマああ！」

苦しそうなうめき声を上げ、こちらを睨むマリア。だが俺は怯まない。

「これ以上やるなら容赦はしな……」

ーグシャンッ！！

突然視界からマリアが消え、壁に生肉が当たる様な音がした。俺はゆっくりと音のする方へ視線を向けた。

「な……?！」

屋敷の壁一面に円形に広がったマリアの血。そしてその中心にはマリア本人がめり込んでいた。

「はあああ……はあああ……!」

そしてマリアの前には、血で赤く染まったジャンヌがいた。その後ろ姿はまるで化け物、いや『悪魔』であった。

「ジャンヌ……」

俺が彼女の名を呟くと、ジャンヌはギロッと睨むように振り返って来た。理性と云う名の枷を外したジャンヌの狂気は、まるで狂気そのものに意志があるかの様に、赤黒い靄で現れている。

「憎い……殺す」

どうやら、次のターゲットは俺の様だった。

二十章『信じたい気持ち—Last Answer—』(後書き)

感想募集中です♪

お気軽にどうぞ！

二十一章『夢の終わり—Ending—』(前書き)

これはFate／StayNightのファンフィクション(二次創作)です

二十一章 『夢の終わり—Ending—』

ジャンヌの凶悪な目が俺を捉えている。俺自身驚いているのだが、俺の中に恐怖感はなく、あるのは深い悲しみだった。凶悪な殺気と悪意の中で、ジャンヌの優しい想いが垣間見えたからだ。

「ジャンヌ……もうやめてくれよ」

「憎い……殺す……憎い……殺す……」

俺の言葉が届いていない。もしくは届いてはいても、既に自分自身を止めることが出来なくなっているのだ。

「なら……来いよ!」

俺はジャンヌのマスターとしてジャンヌと向き合い、戦う覚悟が出来た。それがマスターである俺自身の役目だからだ。

「殺おおす!」

ジャンヌは剣を構えながら向かってくる。そして俺も剣を構え、ジャンヌを見据える。

「はあああ!」

——キイイインッ!

ジャンヌの余りにも重い一撃に、俺の身体が持って行かれ掛けるが、何とか踏み止まることが出来た。だが既にジャンヌは次の斬撃を繰

り出してきていた。

――ガアアアアア――！！

咄嗟に後ろへ跳んだ。間一髪の所で避けられはしたが、絶望的なまでの実力差に思わず笑えてくる。

「ははは……流石はジャンヌだ」

冷静さを欠いているとは言え、ジャンヌの斬撃は的確に俺を捉えている。だが、だからこそ剣筋を読むことも出来る。

――ザッ！

ジャンヌが地面を大きく蹴り出すのが見えた。跳躍時の高さから着地地点を割り出すまでも無く、俺を目掛けているのは明白であった。

「くっ！」

――ガギイイイン！

高い位置から振り下ろした剣の威力は絶大で、アーチャーの残した剣は脆くも砕け散った。

――ブウウウウン――！！

間髪入れずに振られる剣を避けつつ、俺は素早く後退する。このままでは、いずれ俺はジャンヌに殺される。

「憎い……！！」

と、一瞬だけ出来てしまった隙に付け込まれ、ジャンヌが目前に迫って来ていた。

「しまっ……！」

――ブンッ！

――キィィンッ！

死を覚悟しかけた時、目の前に黒い影が現れた。その影はジャンヌの斬撃を受け止めていた。

「くっ！ 傷に響くな……」

影の正体は、傷だらけのマリアだった。先程のジャンヌの攻撃で凄まじい程のダメージを受けたはずなのに、マリアは平然と立ち上がって来ている。

「……どうして」

「勘違いするな、お前を助けた訳じゃ無い……」

不器用な言い草だが、恐らくマリアは俺を助けてくれた。だからこそ、余計に動揺している。

「脆弱なるマスターよ、令呪を使うのだ」

『令呪』その存在を今の今まで忘れていた。この令呪は、自らのサーヴァントに絶対的な命令を下せる呪術だ。つまり、今のジャンヌ

を止められる可能性がある。

「ぐっ！」

——ズザアアア！

マリアが吹き飛ばされたと同時に、俺は自らの令呪を発動させた。右腕に刻まれた令呪が真っ赤に発光し始め、右腕に鈍い鈍痛が走る。

「ぐっ……！ ジャンヌ、元に、元に戻ってくれ！！」

ありったけの力を込めて、目の前のジャンヌに言い放った。すると、俺の首元すれすれでジャンヌの剣の動きが静止した。

「あ、ああ……わあああああ！！」

そして、ジャンヌは叫びながら足元から崩れていった。

——ドサッ

どうやら令呪の効果は絶大のようだ。ジャンヌからは殺気も悪意も綺麗に無くなっている。

「良かった……」

また俺自身にも限界が来たようで、ジャンヌ同様、俺はその場に倒れ込んだ。今回の戦いは身体と云うよりは精神的な疲労の方が酷い。

「……」

意識を失う前、最後に見た空はどこか淀んでいるようにも見えた。
俺はそんな些細な事が引っ掛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1424n/>

Fate/ClosedEyes

2010年10月10日17時14分発行